

萩生田 文部科学大臣 様

いきなりの書簡、不躰だとは存じますが。
以下ご拝読いただければ幸甚でございます。

2019/12/20-4

(英語教育に関する文科省への提言)

日本人は何故、長期間の教育にも拘らず英語が喋れないのか？

答えはひとつ。

「話す中身がないから」です。

何故ないのか？

「話す中身を作るだけの経験数が少ないから」です。

何故少ないのか？

「一度でも失敗したら、すべて終わり」という風土が、経験へのチャレンジ回数を大幅に抑制してしまうからです。

これは同様に、今回から始まる小学校英語教育において生徒のみならず「現場教員」にとっても同様に作用し、教そわる側だけでなく「教える側」をも恐怖のどん底へ陥れてしまいます。

「失敗は許されない。失敗したらどうしよう？」と。

そもそも、語法、文法が一点非の打ちどころがない「中身のないつまらない話」ほど、聞く側にとって嫌味なものはありません。

外国人もそれがつまらない話なら当然「話が弾み」ませんから、次回から話に来なくなってしまいます。

話が面白ければ、文法等はあまり気にしないのが外国人です。

ですから、まず「失敗を許さない縛り」を解く教育法に変えるのが第一義でしょう。

経験を積み、話したいことがたくさんできます。どうしても伝えたい相手が外国人であれば、その人は文法より、まず伝える手段そのものから考え始めるでしょう。

何としても伝えたいんですから。

数字や図表、イラスト、絵、ジェスチャーやハグ、踊りやパントマイム、歌やボディーランゲージなどいろいろあることに気づき、その中の一つとして語学があるに過ぎないことを認識するでしょう。

すると、視野が広がってすそ野が広がった分、語学で失敗してもセーフティーネットが貼られているので、安心して失敗をおかすことができるようになります。

これは経験が生む自信とバリエーション、即ち持ち駒（手持ちカード）の増加によるかさ上げ効果で語学が自然と上達することにもなります。

ですから、もし英語教育を実のあるものにしたいのなら、遠回りになるように見えますが、

最大の近道（ショートカットウェイ）は「失敗こそ成長の源」そのための経験をどんどんすることに価値があるのだという風土を作ることが最優先されるのではないのでしょうか？

従来の考えに従った英語教育の早期化、時間の延長はそれこそ「拷問時間の延長」以外の何物でもありません。

こうした提案は、ともすると既存受験産業の利権構造を脅かすことになるであろうことは、想像に難くはないのですが、この際「創造的破壊」をしないと、我が国国民は世界から完全に取り残されることになるかと老婆心ながら、心底より危惧して居る次第であります。

（以上 本文）

（追記）

上記記事は、2019/12/20に自分（自店）のフェイスブックのページ・サイトに掲載いたしましたものでございます。

自分はネパールカレーレストランの店主でございます。2年ほど前から横浜市青葉区にて、国籍の異なる外国人従業員を3名雇い、店を始めました。

それまでは英語はほとんどしゃべれませんでした。上記のような経緯で今はだいぶしゃべれるようになっております。当年にとって66歳となりました。

ご参考方々お手紙申上げました。

横浜市青葉区すすき野2-6-7すすき野谷本ビル101
宇都宮 一貴